

三 良しとされた

創世記 一章二十四節―三十一節

二〇〇九年一月一日礼拝説教

秋吉隆雄 牧師

皆さん、新年明けましておめでとうございます。新しい二〇〇九年を迎えました。わたしたちは、神様への礼拝をもつてこの年を歩み始めたいと思います。新しい年は、どのような年になるのでしょうか。政治、経済、文化、そのどれを見ても明るい希望が持てる状況にはないように思います。けれども、わたしたちは与えられた信仰に基づいて、どんな時にも神様に向かって、イエス・キリストに従って歩みたいと思います。神様は、わたしたちをそのように導いてくださると信じています。

個人的なことになりますけれども、私は今年の四月に六十八歳になります。もう立派な高齢者です。私が洗礼を受けたのは十八歳の時でした。ですから聖書を読み始めて五十年になります。牧師でありますから、専門的に聖書を学んだと言えると思います。その今、私は聖書に関して二つのことを思っています。

一つは、五十年聖書を学んでも、聖書については分からないことが本当に多いということです。聖書について知っていることは、ほんの少しではないかと思っています。聖書はそういう書物です。

二つ目は、聖書は本当にものすごい本だと思っています。私は牧師になって四十二年になります。牧師の仕事の基本は聖書の言葉の解き明かしの説教です。その説教に苦しみ、出来ずに不貞寝したこともあります。けれども、曲がりなりにも四十二年間、説教を続けてきました。これはすごいことだと思っています。私自身の考えを語れと言われれば、三回ぐらいいはできると思いますが、四十二年間毎週、聖書は語るべき言葉を与えてくれました。今、この時に語るべき言葉を与えてくれる本当に力強い本であるということです。聖書は、なぜそのように言葉を生み出す力を持っているのか。それには理由があります。一つは、旧約聖書は紀元前十九世紀ごろ、アブラハム、イサク、ヤコブなどの族長物語を記しています。新約聖書のテモテ、テトスなどの牧会書簡は、紀元後一世紀ごろに書かれています。聖書は、二千年の長い歴史を積み重ねています。イスラエルの民は、二千年にわたって自分たちの信仰や歴史を文字に書き残してきました。これは他の民族には

見られないことで、彼らは言葉に対して異常に深い、また強い関心を持って文化を形成したということです。二千年の人間の歴史でありますから、人間のありとあらゆる問題が提出されています。話題が尽きることはありません。もちろん今日から見ると、とても陳腐で受け入れ難いこともありますけれども、人間のさまざまな問題が多様に描かれています。これが第一の点です。

もう一つは、聖書は人間の苦難の中で神を求める、すなわち生き方を求めて血を吐くような戦いの中で書かれてきたということです。新約聖書は、パウロの手紙が最初に書かれていますけれども、パウロは福音伝道のために幾多の苦難を味わいました。その苦難の中からパウロ書簡が生まれています。また四つの福音書があります。初代教会の人々は、イエス・キリストに対する信仰に生きようと懸命でした。その彼らは、当時誤解と偏見と迫害を受けていました。その中で、何とかしてイエス・キリストを伝えたいと、あらん限りの努力と忍耐をして、これらの福音書を書き残しました。

旧約聖書においては、イスラエルの民がエジプトの奴隷から解放されて四十年の苦難を経てカナンに進入しました。この喜びの出来事を中心に、民族が苦難の中を、神がいかに自分たちを憐れんでくださったかを書き残しています。この出エジプトの出来事を中心に、現在の私たちが読んでいる旧約聖書の大半はバビロン捕囚前後に編集されたと言われています。バビロン捕囚は、紀元前六世紀、北のバビロン帝国の王・ネブカドネツアルが大軍を率いてエルサレムを包囲し、これを壊滅させます。そして人々を捕虜として、数珠繋ぎにしてバビロンに連行していきます。国が滅びる、捕虜となつて奴隷生活を強いられる。これはどんな苦難でしょうか。出エジプトの出来事は遠い先祖の苦難でありました。けれどもバビロン捕囚は、自分の身に負った耐え難い痛みでありました。このバビロン捕囚の前後に旧約聖書は編集されています。そしてこの時代にエレミヤや、エゼキエルなどの預言者が輩出しています。人間は、苦難を負う時に神を問うのです。それは、人間はいかにあるべきか、社会はどうあるべきか、ということを真剣に問うようになるからです。そのような意味において、聖書の民は苦難の中から信仰の歴史を、血を吐くようにして書き残してきた。ここに聖書が神の言葉として、人間を真に支え、かつ、力を持つ書物として多くの人々に読み継がれてきた理由があります。聖書は無時間的な真理を語っているのではなく、歴史の具体的な戦いの中から生み出された書物です。これが聖書を真に深いものになっています。

さて、二〇〇九年の元旦礼拝に、わたしたちは創世記一章の二十四節から三十一節までの御言葉が示されました。ここは言うまでもなく、神が、天と地とその中にあるすべてを創造されたという「天地創造」が記された箇所であります。そして今日の御言葉はその中で六日目の創造です。それぞれの生き物、家畜、這うもの、地の獣、そして最後に人間が創造された。創造が完成した時のことが記されている箇所です。天地創造物語は、イスラエルの民が信じた全能の神は、天と地を創造した創造主であると語った信仰告白です。信仰告白ですから、もちろん科学的真理ではありません。自分たちの信じる神はこのような神であると告白した、その信仰の内実が、このような形で編集されたのです。

この天地創造の信仰告白には、重要な三つのことが告白されています。一つは、神の創造の最終目的は人間である、と告白しています。第一日から第六日まで神様は次々と創造していきます。その創造の最後に人間を造られた。神は、人間が生きるに必要なすべての舞台を整え終えて、最後に人間を創造された。最終目的は人間創造であると記しています。聖書の神は愛の神様です。愛はひとり、単独では成立しません。愛は関係する相手が必要とし、また求めます。愛の神様は、その愛の対象である人間を造られたのです。人間は神の似姿、神のかたちに造られたと記しています。神のかたちというのは、人格を持って、言葉を持って、また心を通わせて向き合って対話し合う関係、それが神のかたちということです。神様は人間を自分と向き合って、愛の関係を結ぶように人を創造されたのです。わたしたちは神様に愛された者として創造された。このことをまず告白しています。

二つ目に、天地創造はきわめて秩序正しく創造されたと記しています。第一日目、第二日目そして第六日目と、きちんと一定のリズムをもって秩序正しく創造されています。その冒頭において、地は混沌であつたと記しています。その混沌、カオスに秩序をもたらしていく創造の様子を記しています。この秩序は法による完備された秩序とは違います。神にある創造の秩序、このことを力説しています。

三つ目は、創造した後、神様はその日ごとに「良しとされた」と繰り返しています。全ての創造は神様が見て良しとされた。最後六日目の創造が終わった後、神様がこれを見て「見よ、それは極めて良かった」と記しています。創造は神の御心になつてまったく良いものであつたのです。神自身「然り」と是認し、

「良し」とされたのです。天地創造の信仰告白は、このように神様は人間を愛するものとして創造した。そしてその創造の姿は、秩序ある形であって、しかも造られたものをすべて良しとされた。この三つのことが力強く宣言されています。

この告白は一日でできたものではありません。イスラエルの民が何十年、何百年と受け継いだ信仰が、このような形にまとめられていったのです。どうしてこのような形にまとめられたのか。それはバビロン捕囚という民族の苦悩と関係があります。国が他国の軍隊によって滅ぼされる、そして奴隷として捕囚される。そこにおける人々の混乱は容易に想像することが出来ます。預言者たちは、混乱の中で人心がどのように荒廃していったか、神の言葉として語り続けています。エレミヤなどは、「人間にはもはや希望が持てない」と語っています。この状況においては、人間が神様に愛されている、創造の秩序がある、そして神に良しとされたなどということは完全に崩壊し、破れきっています。その破れの中に立って、イスラエルの神信仰者たちはこの創造信仰を告白したのです。「わたしたちは破れている。けれども考えてみよ、我々の信じる神は愛の神である、秩序を尊び、すべてを良しとして創造してくださった神である。この神を仰ぎ見よ」と告白をしたのです。このような信仰に立って創世記の天地創造は書かれています。イスラエルの民は国が敗れて苦しみに沈みました。けれども、この天地創造の信仰告白を読み、また聞かされて、どれほど慰められ励まされたでしょうか。聖書はどのようにに時代の苦難の中で、「神によって生きよ」と励まし、どんな苦境にあつても生かされる言葉として、彼らは書き綴っていたのです。

私は、今年の元旦礼拝に、この創造信仰を申し上げたいと思いました。わたしたちの現在は、他国に占領支配される屈辱を受けているわけではありません。また、奴隷として捕囚の苦しみを受けている者でもありません。けれども私は、今の時、人間が大事にされていない、人間の尊厳が損なわれている。また、神の秩序から逸脱し、神に良しとされた現実から遙かに遠いと思っています。その質は違いますけれども、バビロン捕囚の民が負っていた現実と似ている。心が痛々しく荒んでいると思います。ですから、私は今日の元旦礼拝で、この創造信仰を申し上げて、彼らの破れきった現実からなお神を仰いだ彼らの信仰から学びたいと思っています。彼らは、捕囚の苦しみの現実を、決して否定的、ネガティブ、悲観的、ペシミスティックには見ない。否定的、悲観的な見方は感情論であるという人がいます。その通りではないでしょうか。神を信じる者、聖書の信仰に立つ

者は、神がこの世を良しとして創られたことを信じるのです。神に愛されていることを信じるのです。その者は、この世がどんなに破れていようと、神の然り、神の是認の上に立って生きるのです。それは、肯定的、積極的、ポジティブに、この社会と具体的に関わって生きる生き方です。神が良しとされたその良しに向かつて、今を生きるのです。それは、賢い人から見ると愚かで、強い人から見ると小さな歩みかもしれませんが、神の良しに向かつて生きることによって、わたしたちは救われていくのです。

二〇〇九年の元旦、与えられた創世記の冒頭の天地創造の御言葉から、神が良しとされた世界で、神に愛されている平安をもつて一緒に歩み続けたい。このことを年の初めに与えられた御言葉として一緒に受け止めたい。そう心から願っています。